

家族機能測定尺度（FACESⅢ）邦訳版の 信頼性・妥当性に関する一研究

One of the studies of the Reliability and Validity of FACEⅢ for Japanese

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

立 山 慶 一

Keichi Tateyama

I. 問題

何らかの臨床的な問題を抱える家族に治療的なアプローチを試みる上で、その家族関係のありかたや状態を把握することは重要なことであると考えられる。しかし、家族という社会における最小単位の中で行われる営みは、非常に複雑で情緒的なものであり、また、その独特の秘密性の高さから、家族関係を客観的に捉える事は困難なこととされていた¹⁾。しかし、米国ではすでに家族関係を測定する多くの尺度が開発されており、臨床実践の現場においても、その多くのものが導入され、活用されている。

その中でも、米国で紹介されている976もの家族測定技法の中で、Olson et alによって提唱された円環モデルとその測定道具であるFACESⅢが、家族研究者や家族療法家の間で最も注目されていると論じられている²⁾。

我が国でもFACESⅢの邦訳を試みた研究がいくつかあるが、いずれもOlsonが想定している凝集性と適応性の2因子構造が実証されておらず、その原因の一つとして、質問文の意味のわかりにくさが概念的妥当性をぼやけさせる可能性が指摘されていた。本研究では、現行におけるFACESⅢ邦訳版の質問文のわかりにくさを被験者に指摘してもらい、被験者にとってよりわかりやすい邦訳文に修正し、実証的に検討することを目的としている。

はじめに、FACESⅢの基礎理論として仮定されている円環モデルの概念について説明し、FACESⅢの有効性について述べることにする。そして、我が国での先行研究の概観についても触れることにする。

1. 円環モデルの概要

Minnesota州立大学のOlson研究グループは、円環モデルの生成に先駆けて、それまでに家族に関して様々な分野で提示されてきた諸概念の整理を試みた。その結果、今日までに家族に関する様々な

概念が提唱されてきたが、それらの多くは概念としての意味合いは似ているものの、微妙に異なる定義付けがされており、個々の臨床活動や研究から得られた様々な知見や知識が体系化されずにいることが明らかにされた。

それ故、臨床家や研究者達の間で意見の交換や議論のやりとりができずにいる現状を指摘し、そういった状況を打破するためには、臨床家と研究者および理論家達との知識の交換に必要な共通言語として用いられる概念の存在が必要だと考えた³⁾。

Olson研究グループは、臨床活動には理論的裏付けが必要であり、理論の発展には臨床実践からのフィードバックが不可欠であると考えている。つまり、理論と調査研究および臨床実践間の統合を試みるために円環モデルは開発されたのである。

円環モデルでは、家族の機能度を「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」の3次元で捉える。

凝集性 (Cohesion) は「家族成員間の情緒的絆」と定義されている。凝集性は主に、情緒的な結びつき、家族成員間におけるお互いの関与の程度、時間、空間、意思決定、友人、趣味、余暇活動といった下位項目によって構成されている。凝集性は低い方から、「遊離 (disengaged)」－「分離 (separated)」－「結合 (connected)」－「膠着 (enmeshed)」の4段階に分けられ、中間のレベルである「分離」と「結合」では家族が最も機能的に働くが、両極のレベル「遊離」と「膠着」では家族の機能度が極端に働く為、結果として機能不全に陥り、問題を呈しやすくなるとされている。

適応性 (adaptability) は、「状況的・発達のストレスに応じて、勢力構造や役割を変化させる夫婦・家族システムの能力」と定義されている。適応性は主に、リーダーシップ、規律、話し合いのスタイル、役割関係、規則といった下位項目より構成される。適応性は低い方から、「硬直 (rigid)」－「構造化 (structured)」－「柔軟 (flexible)」－「無秩序 (chaotic)」の4段階に分けられ、これも凝集性と同様、中間のレベルである「構造化」と「柔軟」では家族が最も機能的に働くが、両極のレベル「硬直」と「無秩序」では家族の機能度が極端に働くため、結果として家族に問題を呈しやすくなるとされている。この両次元に共通していることは、両次元とも中間のレベルで働く事がもっとも機能的であり、高すぎても低過ぎても家族は機能的でなくなるという、相対的な中範囲理論仮説である事、である。この関係をOlsonは二次曲線的な関係 (curvilinear) と呼んでいる。

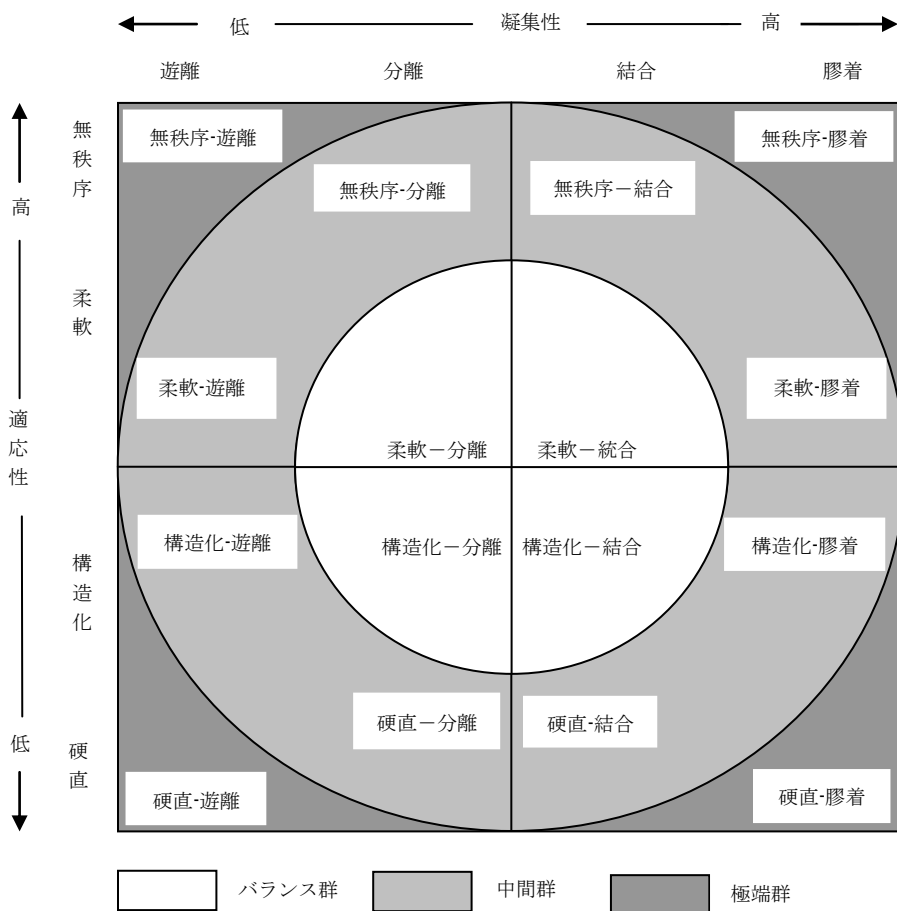
3つ目の次元である「コミュニケーション (communication)」は凝集性と適応性の両次元を促進させる働きを持つ。コミュニケーションはそれぞれポジティブなコミュニケーション技法とネガティブなコミュニケーション技法に分けられる。ポジティブなコミュニケーション技法は同情的、共感的、支持的なメッセージで構成される。ポジティブなコミュニケーション技法は、夫婦・家族の成員が凝集性と適応性に関連する変化の要求とその選択を家族成員間の中で共有することを可能にする為、両次元の変化を状況に応じて変化させる事を促進する。ネガティブなコミュニケーション技法は、逆説的メッセージ、ダブルバインド、批判的な発言で構成されている。ネガティブなコミュニケーション技法は、夫婦・家族の成員が彼らの感情を共有する能力を最小限に抑えてしまうため、状況に応じた

両次元の変化の促進を妨げてしまうのである。コミュニケーション次元は上記に挙げた両次元を力動的に促進させる「促進次元」なので、円環モデルには図示されない。

円環モデルでは、凝集性・適応性における両次元の4つのレベルを組み合わせ、家族を16のタイプに分類している。さらに、これら16タイプの家族は、両次元とも中間レベルにあるバランス（Balanced）群、どちらか一方の次元が中程度で他方が極端な中間（Mid-Range）群、両次元ともが極端な極端（Extreme）群の3つのグループに分けられる。円環モデルの重要な仮説の一つは、バランス群に位置する家族は、最も家族が機能的に働くため問題を呈しにくく、極端群に位置する家族は機能不全に陥るため問題を呈しやすくなる、という仮説である。ここでもまた、両次元とも中程度が最も機能的であるという、二次曲線的な関係が主張されている（図1）。

このような円環モデルの仮説を基に、家族の機能度を、凝集性と適応性の両面から測定する道具として開発された尺度がFACESIIIである。

図1. 円環モデル⁴⁾



2. 家族機能測定尺度FACESⅢの有効性

FACESは当初、111項目からなる質問紙であったが、改訂されてFACESⅡ（30項目）が開発された。その後、さらに改訂が重ねられ現在までにその第3版であるFACESⅢが開発されるに至っている。Olsonによれば、FACESⅡとFACESⅢは、調査研究と臨床実践からのフィードバックによって改訂を重ねられたものであるという。

FACESシリーズを用いた研究は200を超えており、その結果の多くは、機能不全に陥った家族とそうでない家族を弁別することができ、さらには治療前と治療後の家族変化を力動的に捉える事が出来ると主張しており、これらの成果を統合して、FACESⅢは開発されたという。例えば、アルコール依存症者の患者がいる家族と臨床的に問題のない家族を比較した研究では、アルコール依存症患者を持つ家族の21%が極端群に位置していたのに対し、臨床的に問題のない家族ではわずか4%しか極端群に位置していなかったと報告している⁶⁾。

Carnesは、性犯罪者の家族を調査した。その結果、性犯罪者群は健康群に比べて、源家族と現在の家族の両方とも極端群に位置する家族が多いことを明らかにした⁶⁾。

また、Clark, J et alは、神経症群と健康群とを比較したところ、健康群より神経症群の方が劇的に極端群に位置する家族が多かった、と報告している⁷⁾。これらの研究によって、前述した円環モデルの主要な仮説が支持され、FACESシリーズが、家族機能において問題のある家族とそうでない家族とを弁別するのに有効であり、調査研究あるいは臨床的アセスメントを行う上で、有効な測定尺度であることが実証されている。

しかし、一方、青年期の子どものいる家族において、問題のある家族と健康な家族の弁別ができなかったと報告する研究もある⁸⁾。また、円環モデルの主要な仮説である、家族の機能度と凝集性・適応性の二次曲線的な関係が支持されず、むしろ凝集性が高いと家族の機能度は良くなるが、適応性と家族の機能度は何の関連もないとする研究もあり⁹⁾、FACESⅢの信頼性と妥当性については、未だ議論の余地を残している部分もあり、今後のさらなる実証的検討が必要とされている。

3. 我が国での先行研究

我が国でも、FACESⅢ邦訳版の試作はいくつか試みられているが、因子構造上に問題が存在する可能性を示唆する報告や、凝集性と適応性の両次元の独立性が実証されなかったとする報告など、いずれもいくつかの問題点を残している。その原因の一つとして黒川は「表現が西洋的で、回答時に具体的な状況が想定されにくく、回答のしにくさが見られた」と指摘した上で、翻訳する際に、日本語としての表現が不適當であり、今後よりわかりやすい表現で問う必要のある事を指摘している¹⁰⁾。そして、質問文の表現の難さが結果的に概念的妥当性に影響を及ぼすおそれがあると述べた上で、今後の課題として、質問文での問い方を被調査者にとってわかりやすい表現に修正する事の重大さを指摘している。

岡堂は、家族に関する研究は、今までは事例研究に基づいたものが中心であり、家族機能を客観的に評価した実証的研究がまだまだ少ないと指摘した上で、従来の実証的研究の多くは個人が対象であり、家族機能を対象とした研究が少なく、今後の家族心理学にとって残された領域であると位置付けている。

以上、こういった我が国での状況を踏まえると、臨床実践での適用も含め、円環モデルとその質問紙の最新版であるFACESⅢ邦訳版の邦訳を再検討し、我が国で実証的に検討することは意義のあることと思われる。

Ⅱ. 予備調査

1. 目的

家族の機能状態を簡潔に測定できる、自己報告式尺度（FACESⅢ；Family Adaptability and Cohesion Evaluation ScalesⅢ）邦訳版の、質問文のワーディングのわかりにくさを被調査者に指摘してもらい、被調査者にとってより意味がわかりやすいように質問文を再検討および修正を行う。

2. 方法

(1) 調査対象：S大学に在籍する大学生 96名

(2) 内訳：性別（男性21名・女性73名・不明2名）

家族との同居（同居23名・別居71名・不明2名）

学年（2年生86名・3年生8名・不明2名）

(3) 調査時期：2005年6月16日（木）

(4) 調査場所：担当教員の許可を得て、大学の教育学関連の授業時間の一部を利用し、教室にて一斉に実施した。実施時間は15分程であった。

(5) 調査内容

FACESⅢ邦訳版の、現行における邦訳のわかりにくさを指摘してもらうために、本学の大学生を対象に「これからやっていただくアンケートは、家族に対する意識に関するものですが、今回は、各質問項目の表現がわかりやすいかどうかについて皆様にお尋ねしたいと思います。」と教示した。さらに具体的に指摘してもらうために、

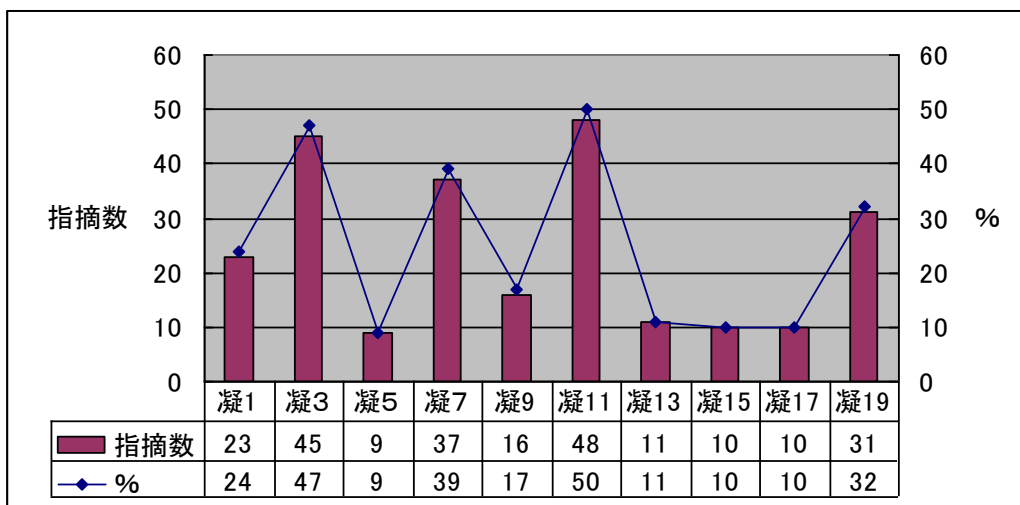
- ① アンケートをやってみて、質問の意味がわかりにくかった質問文があれば、その質問項目の番号を○で囲んで下さい。
- ② その質問項目の意味のわかりにくい部分に傍線を引いて下さい。
- ③ それらの表現についてより適切な表現が思い当たるようであれば、質問文の下にある（ ）の中に書き込んで下さい。
- ④ 意味が良く理解できた質問項目については、回答欄の1～5のいずれかを○で囲んで下さい。

との4つの設問を用意した。回答は、各質問項目の下の（ ）に箇条書きで回答を求めた。また、質問紙全体に対する意見や感想を知るために、質問紙の最後に自由記述欄を用意し、自由記述にて回答を求めた。

3. 結果と考察

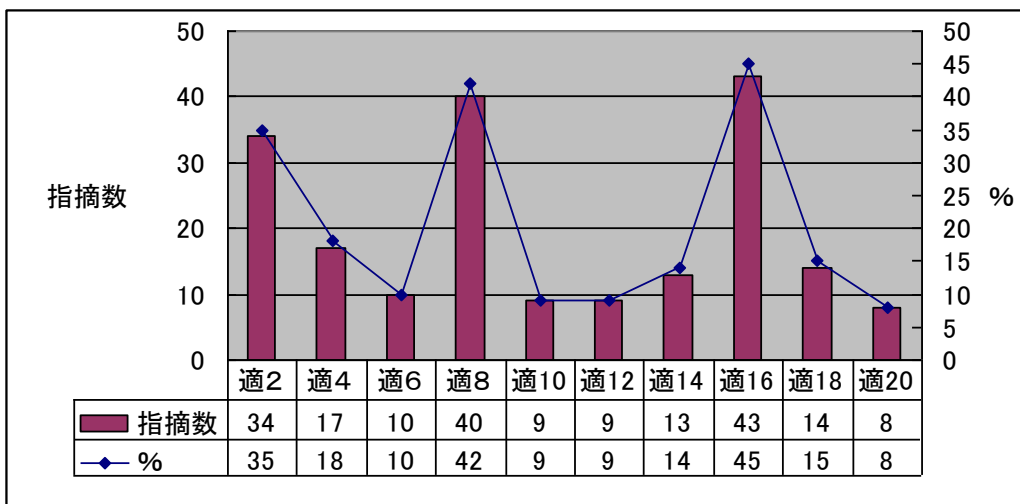
凝集性尺度・適応性尺度の、各尺度における質問項目に対する指摘数のデータをそれぞれ下記に示す。

図2-1：凝集性項目における指摘数の度数分布の棒グラフと相対度数の折れ線グラフ



(N=96 平均値24.0 SD=15.2)

図2-2：適応性項目における指摘数の度数分布の棒グラフと相対度数の折れ線グラフ



(N=96 平均値19.7 SD=13.7)

FACESⅢ邦訳版は凝集性項目10項目（奇数番号）と、適応性項目10項目（偶数番号）の合計20項目からなる尺度である。予備調査の有効回答人数は96名で、96名中「指摘なし」とした対象者は僅か2%（2名）で、対象者の98%（94名）がこの質問紙の質問文になんらかのわかりにくさを指摘した。

また、凝集性項目・適応性項目ともに、特定の質問項目に集中して指摘が集まっており、指摘数に全体としてばらつきが見られたところからも、現行におけるFACESⅢ邦訳版の質問項目の幾つかには表現としての不備があることがうかがえる。

図2-1を見ると、凝集性項目においては項目No3、No7、No11、No19が指摘数の平均値を大きく上回っている。図2-2を見ると適応性項目においては項目No2、No8、No16、が指摘数の平均値を上回る結果となった。これらの結果は、「いくつかの質問項目は表現がわかりにくく、回答時に具体的な状況が想起されにくかった」と指摘する黒川 の指摘を含め、筆者の質問紙に対する主観的な実感を裏付けるものとなった。

これらの結果から、具体的に質問文の内容がどうわかりにくいかを把握するため、全体として20%以上の指摘があった質問項目について、各質問項目の下にある（ ）に箇条書きで回答を求めた具体的な指摘を整理した。次に、指導教授の助言を仰ぎながらアフターコーディングしていったところ、いくつかの категорияに分類することができたので、それらの結果を下記に円グラフにて示す。

各項目における具体的な指摘を参考に、20%以上の指摘があった質問項目については、大幅に邦訳を修正した。修正後の新訳文については、旧訳文との比較のしやすさと見やすさを考慮し、円グラフと併記する。指摘が20%に満たなかった質問項目についても、同じく具体的な指摘を参考に邦訳の末梢的な部分を修正したが、紙上の都合により割愛した。

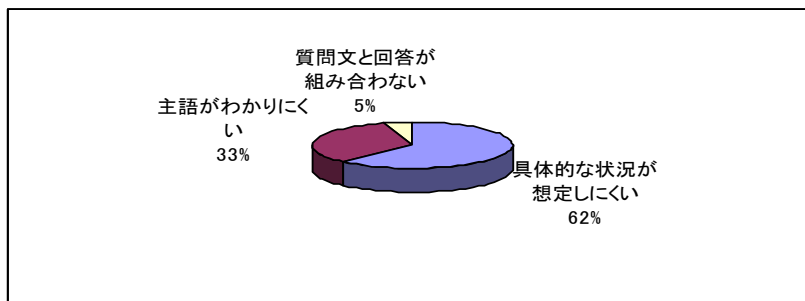
邦訳の再検討および修正の方法については、臨床心理学を専攻する大学院生2人に指導教授を含む3人以上で、原文と意味が変わらないように質問項目の表現を翻訳し直し、修正を行った。

（1）各項目における具体的指摘の分類と邦訳の再検討

・凝集性尺度において20%以上の指摘があった項目の具体的指摘の分類と邦訳の再検討

項目No.1（原文）Family members ask each other for help

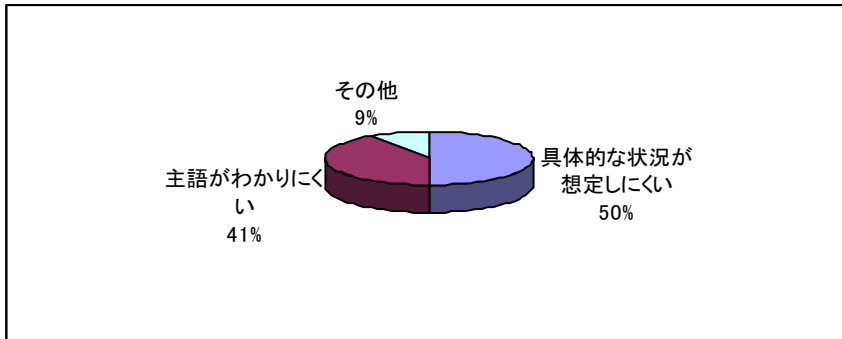
（旧訳文）私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。



⇒（新訳文）私の家族では、困った時、お互いに助け合う。

項目No.3 (原文) We approve of each other's friends

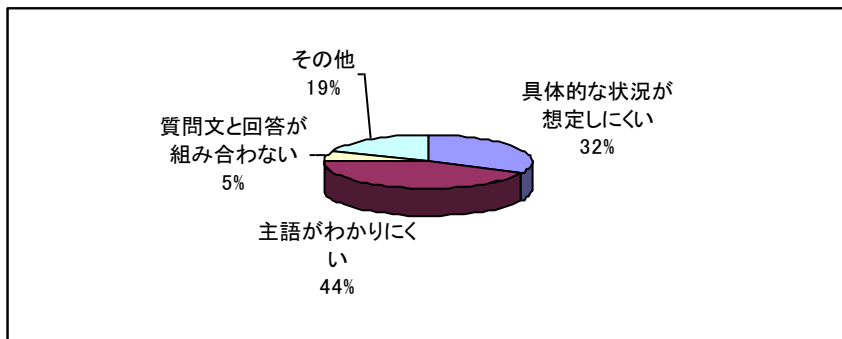
(旧訳文) 家族は、それぞれの友人を気に入っている。



⇒ (新訳文) 私の家族は、お互いの友人を大切にしている。

項目No.7 (原文) Family members feel closer to family than others

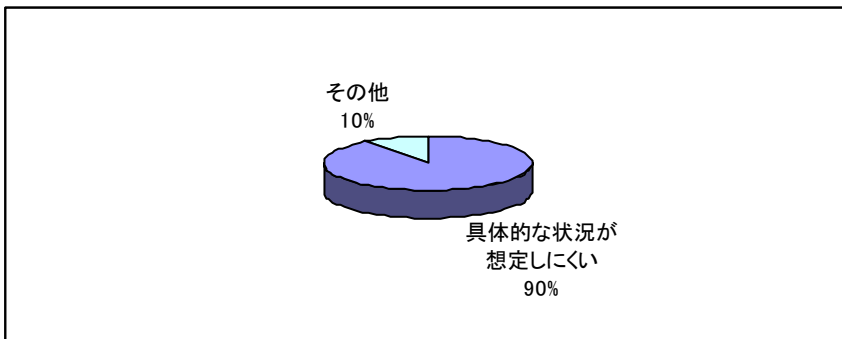
(旧訳文) 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている



⇒ (新訳文) 他人同士よりも、家族同士の方が親しみを感ずる。

項目No.11 (原文) Family members feel very close

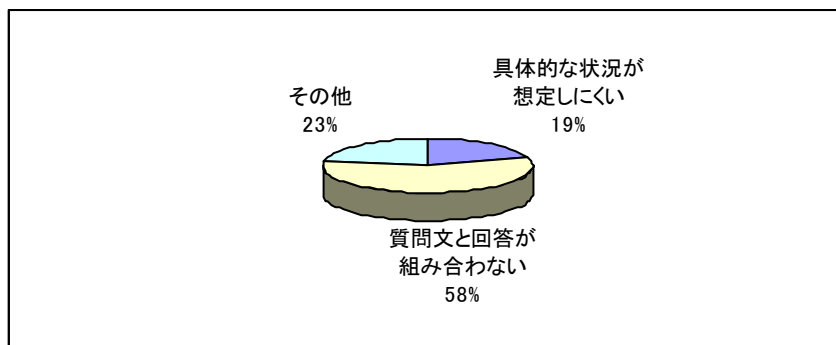
(旧訳文) 私の家族はお互いに密着している。



⇒ (新訳文) 家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている。

項目No.19 (原文) Family togetherness is important

(旧訳文) 家族がまとまっている事は、とても大切である。

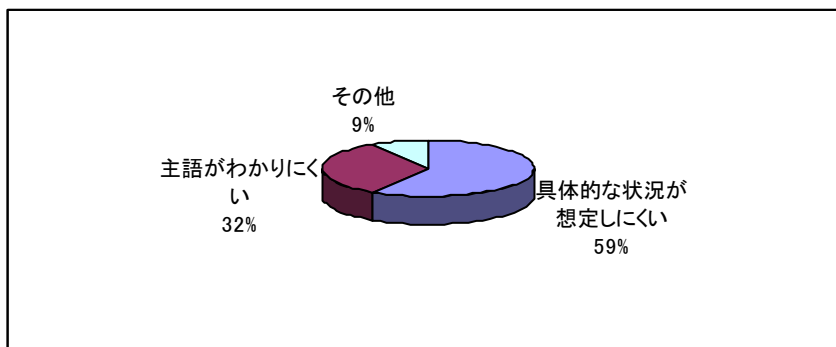


⇒ (新訳文) 私の家族はよくまとまっている。

・ 適応性項目において20%以上の指摘があった項目の具体的指摘の分類と邦訳の再検討

項目No. 2 (原文) In solving problems, children's suggestions are followed

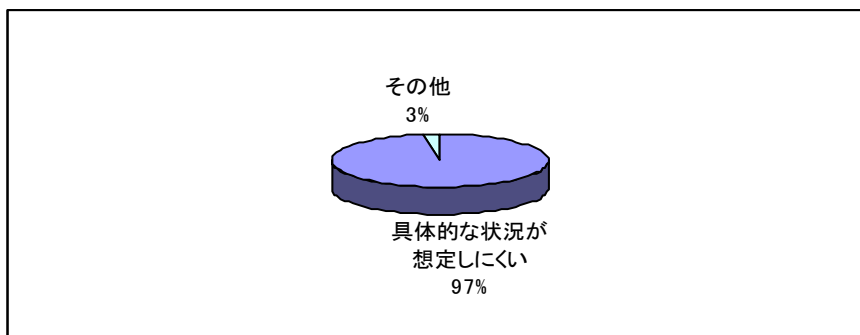
(旧訳文) 私の家族では、問題の解決には子どもの意見も聞いている。



⇒ (新訳文) 家族の問題を解決する際には、子どもの意見も聞き入れられる。

項目No. 8 (原文) Our family changes its way of handling tasks

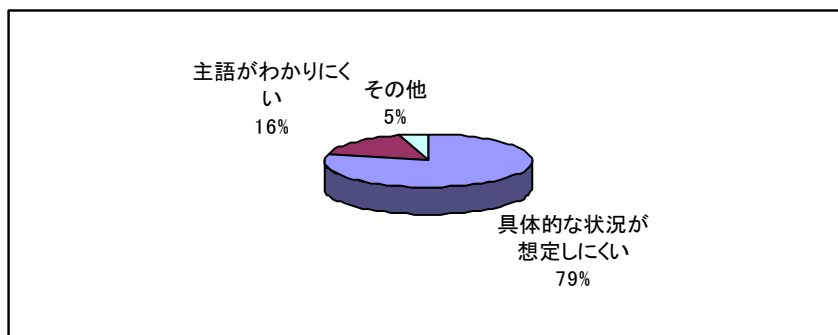
(旧訳文) 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている。



⇒ (新訳文) 私の家族では、何か問題が起きた時その取り組み方を柔軟に変えられる。

項目No.16 (原文) We shift household responsibilities

(旧訳文) 私の家族では、家事・用事は、必要に応じて変わる。



⇒ (新訳文) 私の家では、必要に応じて家事を分担する。

(2) 質問項目以外の部分に対する指摘についての考察

質問紙の最後に自由記述欄を設けたところ、各質問項目に対する指摘以外にも、様々な有用な意見や感想が述べられていた。その中の一つが、「5件法のそれぞれの間隔が間隔尺度として均等ではない」という意見である。現行におけるFACESⅢ邦訳版の回答方法は5件法による評定法であるが、それぞれ「1. まったくない 2. たまにある 3. ときどきある 4. よくある 5. いつもある」と表記されている。この中の(1. まったくない)と(2. たまにある)の距離と(2. たまにある)と(3. ときどきある)の距離が心理的・感覚的に違う、という意見である。

質問紙法による調査を行う場合、特に回答方法に評定法を使用する場合には、間隔尺度の距離ができるだけ等距離性を保つ様に注意を払う事は重要事項の一つである¹¹⁾。そもそも物理的・視覚的には捉えられない心理学研究の場合、対象を、例えばメジャーのような客観的に長さが規定されている計測機で測る事はできない。そう考えると厳密な統計法に従えば、心理学研究における評定法による尺度は間隔尺度とはいえ、本来であれば順序尺度として考えるべきである、とする研究者もいる¹²⁾。しかし、心理学研究の流れにおいて、間隔尺度として捉えた方がより高度な統計法を用いて分析が出来る為、敢えて間隔尺度として捉えるとする慣例がある。ならば、上述したように、本研究における評定法による尺度を間隔尺度と捉えるならば、尺度の距離間隔はできるだけ等間隔になるように注意を払うべきであろう。以上の理由から、現行においてのFACESⅢ邦訳版の5件法による評定法の一部(2. たまにある)を改訂し、新たに「1. まったくない 2. あまりない 3. ときどきある 4. よくある 5. いつもある」とした。

次に多かった意見が「質問文と回答が組み合わない」という意見である。例えば旧訳文の「項目No.19 家族がまとまっている事は、とても大切である。」という質問に対し、「1. まったくない 2. たまにある 3. ときどきある 4. よくある 5. いつもある」という回答では組み合わない、というものである。こういった指摘は黒川が「選択肢の表現にも回答のしにくさがあった」と先行研究でも指摘しており、今回の予備調査でも、より鮮明に明らかになった。こういった点にも注意し、翻訳の修正は慎重に行われ

た。

Ⅲ. 本調査

1. 目的

ワーディングを修正したFACESⅢ (Family Adaptability and Cohesion Evaluation ScalesⅢ) 邦訳版の信頼性と妥当性を検討する。

2. 方法

- (1) **調査対象**：S大学に在籍する1年生から4年生までの大学生 260名
Y大学に在籍する1年生から4年生までの大学生 125名
合計 385名

(2) **調査時期**：①S大学に在籍する大学生：2005年10月4日(火)

②Y大学に在籍する大学生：2005年8月13日(木)

(3) **調査場所**：①②ともに、担当教員の許可を得て、大学の教育学関連の授業時間の一部を利用して、授業の教室にて一斉に実施した。

(4) 調査内容

予備調査により、ワーディングを修正したFACESⅢ邦訳版の凝集性尺度10項目と適応性尺度10項目を合わせた計20項目に、弁別的妥当性を検討するために、MPI (Maudsley Personality Inventory) より、神経症傾向を測定するための項目群20項目と外向性を測定するための項目群20項目を付け加え、合計60項目からなる質問紙を作成した。外向性を測定する20項目を用いた理由は、MPIより神経症傾向を測定する20項目を連続的に羅列しただけでは、神経症傾向が高い被調査者にとっては、心理的に負担がかかり、結果としてテストに対する抵抗を強めてしまう危険性を考えたからである。自己報告式尺度である質問紙法による研究を行う場合、研究者の意図があまりに明確になりすぎていると、被調査者によって意図的に結果を歪められてしまう危険性があることが良く知られている¹³⁾。よって本研究では、外向性項目をフィラー項目(ダミー項目)として用いる事にした。

3. 結果と考察

S大学とY大学に在籍する1年生から4年生までの大学生、計385名を調査対象とし、そのうち記入漏れや記入ミスのあった5名を除いた計380名(有効回答率98.7%)の回答を分析対象とした。それぞれの内訳を示す。

調査対象内訳

- ① S大学に在籍する大学生 255名

性別（男性127名・女性128名）
 家族との同別居（同居69名・別居186名）
 学年（1年生171名・2年生49名）
 （3年生23名・4年生12名）

②Y大学に在籍する大学生 125名

性別（男性53名・女性72名）
 家族との同別居（同居50名・別居75名）
 学年（1年生57名・2年生41名）
 （3年生22名・4年生5名）

(1) 男女別・学年別・家族との同別居別に見る家族認知の傾向

性差別に t 検定を行った結果を表 1 に示す。尺度全体では男性より女性の方が 1%水準の有意差で高かった ($t = 3.29$, $df = 378$, $p < 0.01$)。

表 1 尺度全体の男女別における平均値と標準偏差および t 検定

| 尺度全体得点 | | | | |
|--------|-----|-------|-------|--------------------------------------|
| 性別 | N | 平均値 | 標準偏差 | t 検定 |
| 男 | 179 | 62.18 | 11.26 | $t = 3.29$, $df = 378$, $p < 0.01$ |
| 女 | 201 | 65.87 | 10.52 | |

下位尺度別に検討したものを表 2-1、表 2-2 に示す。凝集性尺度では男性より女性の方が 1%水準で有意に高かったが ($t = 3.84$, $df = 378$, $p < 0.01$)、適応性尺度の方では有意差は見られなかった ($t = 1.44$, $df = 343$, n.s.)。これらの結果より、男性より女性の方が、自分の家族に対して、より強い情緒的な結びつきを感じているといえる。

表 2-1 凝集性尺度の男女別における平均値と標準偏差および t 検定

| 凝集性尺度得点 | | | | |
|---------|-----|-------|------|--------------------------------------|
| 性別 | N | 平均値 | 標準偏差 | t 検定 |
| 男 | 179 | 31.16 | 7.62 | $t = 3.84$, $df = 378$, $p < 0.01$ |
| 女 | 201 | 34.08 | 7.17 | |

表 2-2 適応性尺度の男女別における平均値と標準偏差および t 検定

| 適応性尺度得点 | | | | |
|---------|---|-----|------|------|
| 性別 | N | 平均値 | 標準偏差 | t 検定 |

| | | | | |
|---|-----|-------|------|--------------------------|
| 男 | 179 | 31.18 | 6.41 | t = 1.64, df = 378, n.s. |
| 女 | 201 | 32.06 | 5.20 | |

次に家族との同別居別に t 検定を行い検討すると、尺度全体に有意差は見られず (t = 1.64、df = 378、n.s.)、下位尺度別にも有意差は見られなかった (凝集性 t = 2.01、df = 378、n.s.; 適応性 t = 1.17、df = 378、n.s.)。よって家族との同別居が、家族に対して特に認知の変化をもたらさないものとして、本研究では同別居群を一律に扱って検討する事にした。

最後に 1 年生から 4 年生までの学年別による家族認知の差を検討するために、1 要因 4 水準の分散分析を行い検討したところ、有意差は見られなかった (f = .33、df = 3/376、n.s.)。よって、本研究では学年別群を一律に扱って検討する事にした。

(2) 信頼性の検討

本調査において有効回答となった合計 380 名の回答を対象として、FACESIII 邦訳版の尺度全体得点および凝集性尺度得点と適応性尺度得点の下位尺度得点ごとに Cronbach の α 係数を求めたものを表 3 に示す。尺度全体で $\alpha = .8844$ という値が得られた。この結果から、FACESIII はかなり内部一貫性の高い項目で構成されていることがうかがえる。また、下位尺度別の α 係数では、凝集性尺度で $\alpha = .8803$ とかなり高い内部一貫性を保っていることがうかがえる。適応性尺度では $\alpha = .6858$ とやや低いが、比較的安定していることがうかがえる。これらのことから、FACESIII 邦訳版は、適応性尺度がやや落ちるものの、全体としては高い内部一貫性が認められ、信頼性を満足させる水準にあると考えられる。

表 3 尺度別 Cronbach α 係数

| | |
|-------|-------------------|
| 凝集性尺度 | $\alpha = 0.8803$ |
| 適応性尺度 | $\alpha = 0.6858$ |
| 尺度全体 | $\alpha = 0.8844$ |

(3) 下位尺度間の内部相関の検討

下位尺度間による内部相関を検討するため、下位尺度間の相関係数を求めたところ、有意な正の相関を示した ($r = .71$ 、 $p < 0.01$)。この結果は、Olson の報告する結果 ($r = .03$) とは異なったが、その他のいくつかの先行研究の結果とは、一致する結果であった (貞木ら、 $r = .56$; 草田、 $r = .62$; Hampson et al、 $r = .40$)。下位尺度間の相関が有意に高いという結果は、凝集性と適応性が、互いに独立した次元ではないことを示していると思われる。つまり、凝集性と適応性は、それぞれが両方の意味を含み合ったあいまいな概念である可能性が示唆された。

(4) FACESⅢ邦訳版の因子分析による因子構造の検討

本尺度は5件法からなる尺度であるが、今回の分析では1部の反転項目を除き、各項目の粗点をその項目の得点として分析した。したがって、各項目の得点範囲は1～5点となる。反転項目については各項目の粗点を逆算して算出した。FACESⅢ邦訳版の尺度項目について、被調査者ごとに20項目に対する合計得点を算出した。得点分布（得点範囲：32～94点）を表4に示す。

表4 FACESⅢ邦訳版（20項目）の得点分布

| | |
|------|--------|
| 平均値 | 64.14 |
| 標準偏差 | 11.022 |
| 最小値 | 32 |
| 最大値 | 94 |
| 得点範囲 | 32～94 |

下位尺度毎に見てみると、凝集性尺度の得点分布（得点範囲：13～48点）は、平均値が31.65で、標準偏差が5.816であり、最大値が48、最小値が13であった（表5）。適応性尺度の得点分布（得点範囲：10～50点）は、平均値が32.71で、標準偏差が7.522であり、最大値が50、最小値が10であった（表6）。

表5 凝集性尺度（10項目）の得点分布

| | |
|------|-------|
| 平均値 | 31.65 |
| 標準偏差 | 5.816 |
| 最小値 | 13 |
| 最大値 | 48 |
| 得点範囲 | 13～48 |

表6 適応性尺度（10項目）の得点分布

| | |
|------|-------|
| 平均値 | 32.71 |
| 標準偏差 | 7.522 |
| 最小値 | 10 |
| 最大値 | 50 |
| 得点範囲 | 10～50 |

FACESⅢ邦訳版の20項目について、まずは男女別に、主因子解のバリマックス回転による因子分析を行った。その際、Olson et alの研究結果の再現を優先して、抽出因子は2と設定した。その結果、男女とも、ほぼ同じ結果であったので、次に男女込みにして同様に因子分析を行った。その結果を図3に示す。

因子負荷量が.35以上で、かつ、両方とも因子負荷量の高いものにはより高い方を優先させたところ、凝集性因子には一部、第1、第2因子の両方に高い負荷量を示す項目があるものの、ほぼ第1因子に高い負荷を示しており、Olson et al¹⁷⁾の研究結果とほぼ同じものとなった。

次に、適応性因子の方を見てみると、第1、第2因子のどちらにも高い負荷量を示す項目が多い、という結果となった。これらの結果は、Olson et al¹⁸⁾の研究結果とは大きく異なったが、貞木¹⁹⁾や、茂木²⁰⁾の報告している結果とはほぼ同じ結果となった。貞木は、高校生を対象にFACESⅢ邦訳版を用いて検討しているが、因子分析を行った結果、やはり適応性尺度の因子としてのまとまりが悪く、適応性因子についての因子構造上に問題があることを示唆している。小学生から高校生までを対象にFACESⅢ邦訳版を用いて検討した黒川の分析ではこの傾向がより鮮明になっており、彼は因子分析の結果から、適応性尺度を「融通性」と「民主性」の2因子に分割する事を提案している。このように、FACESⅢ邦訳版の適応性次元には、因子構造上の問題があることが指摘される。大学生を対象にした本研究においても、先行研究の結果同様、因子的妥当性は確認されなかった。

図3 FACESⅢ邦訳版の因子分析

| 質問項目 | 因子 | | |
|---|-------|-------|------|
| | I | II | 共通性 |
| I. 凝集性因子 | | | |
| 1. 私の家族では、困った時、お互いに助け合う | .455 | .552 | .511 |
| 3. 私の家族は、お互いの友人を大切にしている | .288 | .494 | .321 |
| 5. 私の家族は、みんなで一緒に何かをするのが好きである | .631 | .302 | .510 |
| 7. 他人同士よりも、家族同士の方が親しみを感じる | .263 | .499 | .336 |
| 9. 私の家では、自由な時間を家族と一緒に過ごす | .565 | .283 | .406 |
| 11. 家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている | .585 | .505 | .585 |
| 13. 何かをする時は、家族みんなでやる | .743 | .192 | .544 |
| 15. 私の家族は、みんなで一緒にやりたいことがすぐに思いつく | .582 | .336 | .471 |
| 17. 私の家では、何かを決める時、家族の誰かに相談する | .448 | .335 | .366 |
| 19. 私の家族はよくまとまっている | .609 | .466 | .612 |
| II. 適応性因子 | | | |
| 2. 家族の問題を解決する際には、子どもの意見も聞き入れられる | .166 | .668 | .407 |
| 4. 私の家族は、子どもの意見も聞きつつ、しつけをしている | .187 | .652 | .426 |
| 6. 家族を引っ張って行く者（リーダー）は、その時々状況に応じて変わる事がある | .036 | .409 | .231 |
| 8. 私の家族では、何か問題が起きた時、その取り組み方を柔軟に変えられる | .332 | .544 | .391 |
| 10. 私の家族は、いろいろな事についてよく議論する | .413 | .412 | .393 |
| 12. 私の家では、子どもが自主的に物事を決める | .001 | .357 | .136 |
| 14. 家族内の決まりごとは、その時々に応じて変わる | .099 | .174 | .154 |
| 16. 私の家では、必要に応じて家事を分担する | .439 | .118 | .256 |
| 18. 私の家には、常に中心的存在の人がいる* | -.415 | -.015 | .227 |
| 20. 私の家では、家事の分担が決まっている* | -.368 | -.021 | .210 |
| 因子負荷量二乗和 | 3.73 | 3.38 | |

| | | |
|-----------|-------|-------|
| 寄与率 (%) | 18.68 | 16.91 |
| 累積寄与率 (%) | 18.68 | 35.59 |

* がついているものは反転項目

(5) MPIによる弁別的妥当性の検討

① 神経症傾向高群と低群の抽出

MPI (Maudsley Personality Inventory) の神経症傾向20項目は、「はいー?ーいいえ」の3件法からなる尺度であり、それぞれ「はい」と答えると2点、「?」と答えると1点、「いいえ」と答えると0点が加算される。したがって各項目の得点範囲は0点～2点となる。神経症傾向を測定する尺度項目について、被調査者ごとに20項目に対する合計得点を算出した。その結果を表7に示す。平均値が22.27で、標準偏差が9.20であり、最大値が40、最小値は1となった。

表7 MPI神経症傾向測定尺度(20項目)の得点分布

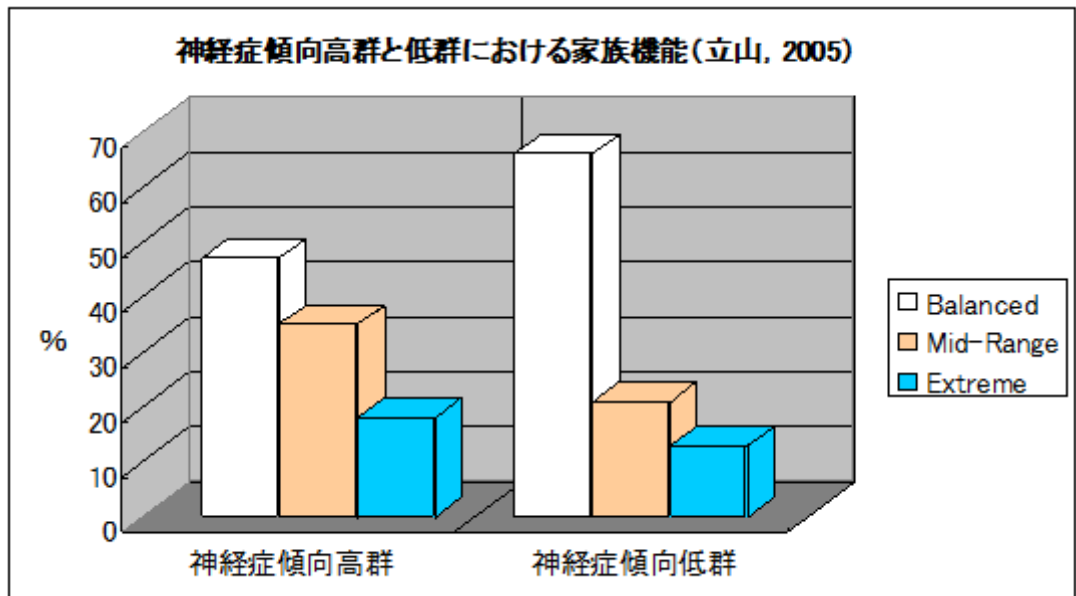
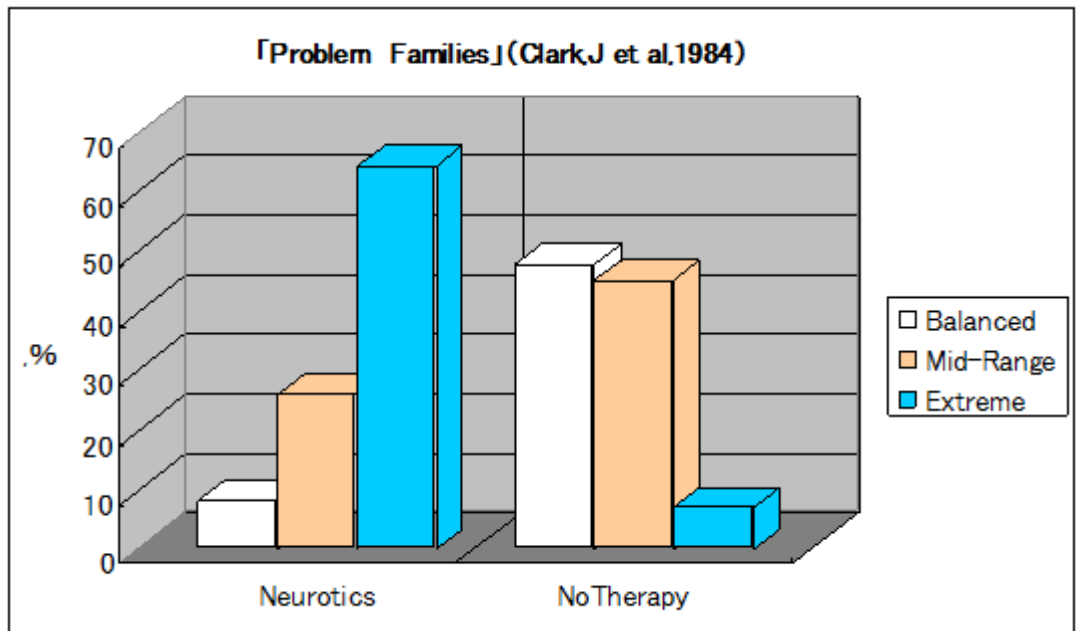
| | |
|------|-------|
| 平均値 | 22.27 |
| 標準偏差 | 9.20 |
| 最小値 | 1 |
| 最大値 | 40 |
| 得点範囲 | 0～40 |

本研究で有効回答となった380名を対象に、MPIより得られた得点を基準に、神経症傾向の高群と低群をそれぞれ抽出した。抽出の基準としては、MPIの神経症傾向得点により被調査者を四分位法により4分割し、Cutting pointとして、神経症傾向得点の高かった上位25%以上の群を「神経症傾向高群」とし、神経症傾向得点の低かった下位25%以下の群を「神経症傾向低群」とした。その結果、380名中、74名が「神経症傾向高群」として抽出され、92名が「神経症傾向低群」として抽出された。よって、計166名が分析対象となった。

② 家族機能度の違いによる神経症傾向高群と低群の弁別

Olson et alは家族の機能度によって家族のタイプを判別する際の基準として、凝集性と適応性の両次元を、それぞれ平均値±1標準偏差による4段階に分割することを勧めている。円環モデルの概要で上記したように、凝集性は低い方から「遊離－分離－結合－膠着」、適応性は低い方から「硬直－構造化－柔軟－無秩序」の4段階の状態に分割できる。これに従い、本研究でも有効回答380名の結果に基づいて、凝集性尺度・適応性尺度の平均値と標準偏差から、暫定的に家族の機能度の段階を4×4の16タイプに分類し、この分類をもとに家族群を「極端群－中間群－バランス群」の3群に分類する基準を設けた。次に、抽出された神経症傾向の高低群、計166名をそれぞれ「極端群－中間群－バランス群」の3群に分けた。そして、これら3群に群分けされた家族群によって、今回、問題のある家族の指標として取り上げた神経症傾向の高群と低群が弁別できるかを検討した。Clark, J et al²¹⁾の先行研究と比較したものを図4に示す。

図4 Clark, J et al (1984) と立山 (2005) の比較



Clark,J et alは、問題のある家族の指標として、神経症を臨床群として挙げFACESIIIを用いて実証的な検討を試みている。結果、神経症群 (Neurotics) と、治療を受けていない正常群 (No Therapy) では、家族の機能度が劇的 (dramatically) に違っている事を示し、FACESIIIによって両群を弁別できる可能性を示唆している。この米国での研究に倣い、本研究でもMPIを用いて、神経症傾向の高群

と低群を弁別できるか追試的に検討した。

先行研究と比較した結果、本研究の結果はClark, J et alの研究結果を全面的に支持する程、劇的な結果は得られなかった。その原因の一つとして、本研究では、臨床群ではなくあくまで正常群を対象に神経症傾向の高群と低群を抽出した為、先行研究の報告ほど劇的な結果は得られなかったものと思われる。しかし、表8に示すように、神経症傾向高群（Balanced群48%）より、神経症傾向低群（Balanced群66%）の方がBalanced群に位置する家族が多く、半数以上の家族がBalanced群に位置しており、さらに、神経症傾向高群（Mid-range群35%、Extreme群18%）の方が、神経症傾向低群（Mid-range群21%、Extreme群13%）より、極端な家族群に位置している家族が多い事からも、本研究の結果でも一応の支持は得られたと見てよいと思われる。本研究ではこれらのデータを基に、神経症傾向高群と低群で下位尺度間に差は見られるか、さらに詳細な検討を試みた。

表8 神経症傾向高群と低群の家族機能度による比較

| 家族タイプ | 神経症傾向 |
|------------|-------------------|
| Balanced群 | 高群（47%） < 低群（66%） |
| Mid-Range群 | 高群（35%） > 低群（21%） |
| Extreme群 | 高群（18%） > 低群（13%） |

③ 神経症傾向高群と低群の各下位尺度間の検討

神経症傾向の高群と低群からそれぞれ得られた凝集性尺度得点と適応性得点の平均値と標準偏差を表9-1、表9-2にそれぞれ示す。凝集性と適応性の各尺度別に、神経症傾向の高群と低群との間に差は見られるかどうかを検討するため、それぞれにt検定を行った。その結果、凝集性尺度得点では、神経症傾向高群よりも、神経症傾向低群の方が5%水準で有意に高く（ $t = 2.83$, $df = 164$, $p < 0.05$ ）、適応性尺度では有意差が見られなかった（ $t = 1.80$, $df = 164$, $n.s.$ ）。

この結果は、神経症傾向が高い群よりも、神経症傾向の低い群の方が、家族との情緒的なつながりを強く感じているということを示唆しているといえる。また、凝集性が高いと精神的健康度も高い、という凝集性と精神的健康との直線的（linear）な関係を示唆している可能性がある。

Green et al²²⁾は、米国の2440家族を対象に、幸福度尺度（GCS : Hudson's Generalized Contentment Scale）を用いて、FACESIIIとの関連を検討したところ、幸福度尺度と凝集性との間には正の相関があったが、幸福度尺度と適応性の間には何の関連もみられなかった、という報告をしている。さらに、Hampson et al²³⁾は、SFI（Self-Report Family Inventory）の健康因子とFACESIIIの凝集性には高い相関があった（ $r = .84$ ）、と報告している。本研究の結果は、Green et alやHampson et alの研究結果を、別の側面から支持する結果となった。

表9-1 凝集性尺度の神経症傾向高・低群別における平均値と標準偏差およびt検定

| 凝集性尺度得点 | | | | |
|---------|----|-------|------|-------------------------------|
| | N | 平均値 | 標準偏差 | t検定 |
| 神経症傾向低群 | 94 | 33.83 | 7.30 | t = 2.83 df = 164 p < 0.05 |
| 神経症傾向高群 | 72 | 30.39 | 8.32 | |

表9-2 適応性尺度の神経症傾向高・低群別における平均値と標準偏差およびt検定

| 適応性尺度得点 | | | | |
|---------|----|-------|------|----------------------------|
| | N | 平均値 | 標準偏差 | t検定 |
| 神経症傾向低群 | 94 | 32.07 | 6.44 | t = 1.80 df = 164 n. s. |
| 神経症傾向高群 | 72 | 30.31 | 5.95 | |

IV. 総合考察

我が国で今まで議論されてきた、FACESIII邦訳版が実証されない理由として、①FACESIII邦訳版の質問紙としての因子構造上の問題、②文化差の問題、③翻訳文の不備の問題、等が挙げられてきたが、実際はこれらの要因が複雑に絡み合っており、どこからどこまでが文化差の影響で、どこまでが質問紙としての問題なのか、今回の研究でははっきりと明らかにすることはできなかった。しかし、翻訳を再検討しただけでは実証性が支持されるわけではないことは示唆された。よって、FACESIII邦訳版を臨床場面に用いるにはまだ十分な注意が必要であり、慎むべきであると考えられる。

また、今後の課題として、サンプル数の拡大が指摘される。今回の研究の被調査者は一部大学の大学生のみであり、この結果を過度に一般化することはできない。また、本研究では、MPIを用いて健常群を対象に、神経症傾向の高群と低群を抽出し、その両群を弁別できるかを検討したが、今後は健常群のみではなく臨床群を用いて比較検討する研究の必要性が指摘される。

注

- 岡堂哲雄(編) 1988『家族心理学の課題と方法』 講座家族心理学 6
家族心理学の理論と実際 第1部・第1章 金子書房 3頁～29頁
- Touliatos, J., Perlmutter, B.F. & Straus, M.A. 1990 *Handbook of Family Measurement Techniques* Newbury Park: Sage.
- Olson, D.H. et al 1979 "Circumplex Model of Marital and Family Systems: I. Cohesion and Adaptability Dimensions, Family Types, and Clinical Applications" *Family Process*, 18 pp3-28
- Olson, D.H. 1990 "Family Circumplex Model: Theory, Assessment and Intervention" *Journal of Family Psychology Special Issue*, 4, pp.55-64.

- 5) 4) 同。
- 6) Carnes, P.J. 1987 “Counseling sexual abusers.” Mineapolis : CompCare Publications.
- 7) Clark, J. 1984 “The family types of schizophrenics, neurotics and normals.” Family social science, University of Minnesota.
- 8) Green, R. G., Harris, R. N., Forte, J. A., & Robinson, M. 1991 “Evaluating FACESIII and the Circumplex Model:2,440 families.” *Family Process*, 30 pp55-73
- 9) Hampson, R. B., Hulgus, Y. F., & Beavers, W. R. 1991 “Comparisons of self-report measures of the Beavers Systems Model and Olson’s Circumplex model.” *Journal of Family Psychology*, 4, pp326-340
- 10) 黒川潤 1990「円環モデルに基づく尺度(和訳版)の標準化の試み」家族心理学研究 4 (2) 71頁～82頁
- 11) 織田輝準1970「日本語の程度量表現用語に関する研究」教育心理学研究 18 166頁～176頁
- 12) 吉田寿夫(著) 1998『本当にわかりやすいすごく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本』北大路書房
- 13) 鎌原雅彦他(編著) 1998『心理学マニュアル-質問紙法-』北大路書房
- 14) 貞木隆志ら1992「家族機能と精神的健康」心理臨床学研究10 (2) 74頁～79頁
- 15) 草田寿子1995「日本語版FACESIIIの信頼性と妥当性の検討」カウンセリング研究 28 154頁 - 162頁
- 16) 9) 同。
- 17) Olson, D.H 1986 “Circumplex Model IV: Validation Studies and FACESIII” *Family Process*, 25
- 18) 17) 同。
- 19) 14) 同。
- 20) 茂木千明 1994「家族機能査定に関する研究」家族心理学研究 8 95頁～108頁
- 21) 7) 同。
- 22) 8) 同。
- 23) 9) 同。

<参考文献>

- Beavers, W.R. & Voeller, M.N. 1983 “Family Models: Comparing and Constructing the Olson Circumplex Model with the Beavers Model.” *Family Process*, 22, pp85-98
- Olson, D.H. et al 1985 “Family Inventories: inventories used in a national survey of families across the family life cycle” St. Paul, MN: *Family Social Science, University of Minnesota*
- W. Robert Beavers et al 1991 “Comparisons of Self-Report Measures of the Beavers Systems Model and Olson’s Circumplex Model” *Journal of Family Psychology*, 4 pp326-340
- 磯田明子・清水新二・大熊道明1987「円環モデルをめぐる諸問題—モデルの生成発展の過程—」家族療法研究 4 27頁～39頁 MPI研究会(編)新・性格検査法—モーズレイ性格検査—
- 遠藤久美子ら1999「家族システムの機能状態が親の養育にどのような関わりをもつか」CCI年報12 29頁～39頁
- 大塚美和子・立木茂雄1991「Clinical Rating Scaleによるオルソン円環モデルの実証的検証」家族心理学研究 5 (1) 15頁～32頁
- 菅原ますみ(他) 2002「夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連」教育心理学研究 50 129頁～140頁
- 草田寿子・平岡優子1993「家族関係査定に関する実証的研究(1)」日本カウンセリング学会大会発表論文集
- 小塩真司(著)「SPSSとAmosによる心理・調査データ解析」東京図書
- 斎藤学2000「家族の機能とこころの問題」家族機能研究所紀要 15頁～19頁
- 曾田邦子・高橋さおり・中安裕子1992「家族システムの視点からみた中学生の無気力と家族関係」関西学院大学社会学部紀要
- 高橋哲「家族サブシステムの機能」家族心理学研究 第2巻 第2号 153頁～162頁
- 高橋直美1998「両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について」家族心理学研究 第12巻 第2号 109頁～123頁
- 武田丈・立木茂雄1989「家族システム評価のための基礎概念」関西学院大学社会学部 紀要60 73頁～97頁
- 武田丈・立木茂雄1991「オルソン円環モデルの構成概念妥当性の検証に関する方法論的研究」家族心理学研究 5 (1) 33頁～51頁
- 中田洋二郎・田頭寿子・リンダベル他1991「思春期の子どもを持つ家族の家族機能について」家族療法 8 (1) 40頁～53頁
- 西出隆紀 1993 「家族アセスメントインベントリーの作成」家族心理学研究 7 (1) 53頁～65頁

- 西出隆紀・夏野良司1997「家族システムの機能状態の認知は子供の抑鬱感にどのような影響を与えるか」教育心理学研究 45 456頁～463頁
- 廣田君美・貞木隆志・森上幸夫他1990「日本語版FACESⅢの作成」関西心理学会大会発表論文集
- 平尾桂・福永英彦・松岡克尚他 1992「オルソン円環モデルの構成概念妥当性に関する理論的・実証的研究（Ⅳ）」
関西学院大学社会学部紀要
- フィリップ・バーガー（著）1986「家族療法の基礎」
- 藤森秀子他「家族関係と子供の発達 2 家族関係とこどもの発達について」日本心理学会 第62回大会発表論文集
8頁～10頁
- 茂木千明1992「家族の健康性に関する一研究」家族心理学研究10（1）47頁～62頁
- 茂木千明2001「健康な家族機能に対する評価」家族心理学研究 第15巻 第2号 109頁～123頁